

国際シンポジウム

香りの文化

日時：12月13日（木）

場所：インドネシア国立セブラスマル大学他

<挨拶>

柴田徳文（国士舘大学政経学部）

<国際共同セミナー>

テーマ

「ジャパノロジーとジャワノロジー ― 香り文化を中心として―」

講演者等：戸津正勝（国士舘大学政経学部）、

ムルヤニ（ジャワ王宮香り文化専門家）

<ワークショップ>

「香道（公家流源氏香）」及び「ジャワの伝統婚礼と香り」について

解説者：中子雅子（茶道、香道家）

ムリヤティ・スディプヨ（ムスティカ・ラトゥ・オーナー）

コーディネーター：柴田徳文、戸津正勝

柴田徳文「挨拶」

本日、香りと文化についてのシンポジウムが、セブラスマル大学と国士舘大学の共催で開催されますことは、私にとりましてこの上ない喜びであります。また、この席に国士舘大学アジア・日本研究センターを代表してご挨拶できますことは、無上の光栄に存じます。

先ず、今回のシンポジウムを開催するにあたり、その準備のために多大な尽力をされました、セブラスマル大学及び関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

このたび、セブラスマル大学におきまして、日本文化研究センターの設立の運びとなりましたことは、同様の研究を行っております私共といたしまして、これに勝る慶びはございません。

ご存じの通り、21世紀はアジアの世紀であります。アジアは、経済の面において、また産業の面において、世界の牽引役となっております。そして、それに加えて、文化の面でも世界を指導する立場にあると存じております。このことは可能性としてばかりではなく、義務であるとも考えております。

なぜなら、今日、世界は多くの困難な問題を抱えておりますが、そのことは、これまでの欧米が指導してきた問題解決方法に足りないところがあることを示していると思われます。アジアの文化

のなかに、もっと根本的な問題解決方法があるのだと考えております。そして世界は、それを待っているのです。

アジアの文化は、決して一様なものではありません。多様性に富んでおります。これまで世界をリードしてきた欧米の文化は、世界に画一化をもたらそうとするものでありました。それと異なり、アジアの文化は、多様性の中に調和を求めるものであります。これこそが、分裂に分裂を重ね、困難の極みの中にいる今日の世界を危機から救い出す一つの方法を提供するものではないかと考える次第です。

文化の面において、アジアが、世界に貢献する役割を荷っているのは、大学に外なりません。欧米には長い歴史的伝統を持った大学が多数存在します。私はそれらの大学が、今日世界の学界、思想界、教育界に強い力を振るっていることを否定するものではありません。

それらの大学に伍して、またそれらを凌駕して活動することは、一見大変に困難なようですが、不可能ではありません。アジアには優秀な大学が数多く存在します。それらの大学が互いに連携をすることが大事であります。アジア各地の大学が、あたかも一つの大学のように機能すれば、欧米のどの大学も及ばないような、大規模、かつあらゆる分野を網羅する大学ができ上ると思います。そのような大学で、学生たちは、アジアの各地に移動しながら自由に学ぶことができ、アジアの多様性を現地で体得して、そのうえで世界に貢献し得る人材を養成することができると信じております。今回のシンポジウムは前回に引き続き、そのよう試みの中での前進でもあると確信しております。

本日は、誠にありがとうございます。

戸津正勝「香り文化と日本人」

はじめに、私の弁明から始めることをお許しいただきたいと思います。実は、このセミナーとワークショップのテーマを「香りの文化」にしようとしたのは私です。私の古い友人で、後で行う「香道」の実演の中心人物である広木さんより、戸津さんもアジアの伝統文化を研究しているのでしたら、日本の伝統的な香り文化である「香道」を体験されたら如何ですか、と薦められて香道を始めました。それが、始めてみたら大変面白く、日本の香り文化は奥が深いものであることを知るようになりました。それにもかかわらず、「香りの文化」についてのアカデミックな研究やそれに関するセミナー等は今まであまり行われてこなかったことに驚かされました。茶道、花道、浮世絵、アニメといった日本のポップカルチャーは世界に広く知られ、人気を博しています。しかし、ここにおられる皆さんの殆どは「香道」という日本を代表する伝統文化の名前さえ御存知ないことと思います。そういう私もまだまだ香道についてはあまり良く解っていないのです。私はバティックやイカットあるいは着物といったアジアの伝統服飾、民族服飾の文化を地域研究の視点から研究してまいりました。したがって、香り文化の専門家でもない私がここに立って、香りについて皆様にご話をするということはとても申し訳なく思っています。何度もお断りしようと思ったのですが、私がこのセミナーの提案者であったため、逃げるわけにもいかず、後で行われる香道の予備知識を皆様にご提供いただくための簡単なガイド役として、またひとりの平均的な日本人が香りというものをどう考えているかということをご提供いただくことは少しは意味があると

考えて、スピーチを引き受けた次第です。

私は日本の古い都である京都で生まれました。京都は周囲を山で囲まれ、河の水もきれいな町として知られています。1200年に及ぶこの美しい町で日本の代表的な伝統文化の多くが発達を遂げてきました。もちろん、日本の香り文化の中心地も京都です。日本には春夏秋冬という4つの季節があります。この季節の微妙な変化によって京都の景色の美しさも変化していきます。その変化は京都の香りにも大きな影響を与えます。3月に入ると山から吹いてくる優しい風が春の香りを運んできます。4月には桜の香りが町全体を包み込みます。かすかな桜の香りもたった1週間ほどであつという間に花とともに消えてしまいます。5月には山々の木々や竹林の新芽の香りが京都の町に降りてきます。この新芽の香りによって桜の香りでウキウキとした京都の人々の心を落ち着かせるようになります。6月は雨の季節で、約1ヶ月間雨の香りでいっぱいになります。雨は木々や草や苔を生き生きとさせ、それらの植物は各々の生命の香りを放つようになります。7月から8月は京都を40度に近い強烈な熱帯の香りが襲ってきます。私はこの夏の香りが子供のころからとても好きで、私がインドネシアを研究対象とした原因の一つになっています。10月から11月になると、京都の山々は緑から黄色へ、さらには赤色へと微妙に変化しながら落葉となって散っていきます。日本人はこの落葉の香りがどういう訳か好きなのです。かすかな落葉の匂いから人生の無常、はかなさを感じ取るのです。これが日本文化の重要なテーマなのです。12月から2月にかけての京都は凍えるような寒さの日々が待っています。しかし雪の京都は格別に美しい景色に様変わり致します。そしてここにも冬独特の香りが訪れます。雪の香りは人間の心のなかにある邪悪なものを消し去るような清々しい香りです。

このような美しい自然の変化と日本人の生活の中で、日本独自の様々な伝統文化が京都を中心に発達してきました。そして、それは日本の自然の中に見えない形で隠れている神秘的な美の追求という日本文化の特徴を生み出してきたといえます。

今、京都の町は世界的なアロマセラピーの流行もあって、香りの店が数多く開かれており、高齢者だけでなく若者たちからも人気を博しています。とくに昔ながらの伝統の香りに注目が集まっています。ところが京都はすでに1000年以上も前に世界でも稀な香り文化の発達した都でありました。その時代の京都の人々にとって、香りは自分を表現する重要な手段であり、香りによって愛が演出されていました。そのことはこの時代の男女の愛を描いた世界で最も古い大長編小説である『源氏物語』にみごとに表現されています。それは香りの文化の物語なのです。当時、東南アジアで産出された香木は大量に日本に輸入され、それ以降日本は世界最大の香木大国であったといわれます。この物語に出ているのですが、自分が作り出した良い香りを焚いて着物にしみこませたり、その材料を小さな袋の中に入れて男も女も持ち歩いたりしていました。しかしある女性がそれでは満足できず、その丁字という名前の香りの材料で着物を染めることを考えたのです。それで美しい色と良い香りの着物が誕生しました。丁字というのはインドネシア語でクレテックのことです。もともと日本には独特の香りを持つ材料は存在しませんでした。日本は全く香りの木は存在しないのです。日本が初めてこの材料に出会ったのは6～7世紀の仏教の到来からだといわれています。それは祈りの香でありました。日本人はこの香も大切に守ってきました。しかし祈りの香とは別に、日本人の精神文化を高めるための重要な要素として平安時代からの文化を受け継ぎ発展してきたのが「香道」

の世界です。そしてそれが完成するのは源氏物語の時代から500年ほど経た17世紀の江戸時代の中期です。この270年に及ぶ江戸の平和の時代、日本人が長い歴史の中で受け継ぎ発展させてきた様々な伝統文化、たとえば着物、茶道、花道、能、浮世絵から歌舞伎、演劇、相撲、踊り、詩、小説さらには多様な伝統工芸品といった全ての分野で大衆文化が開きます。それは貴族、武士、町人、農民という身分を越えて、全国に広がっていったのです。日本文化がヨーロッパをはじめとする外国文化と大きく違うのは、まさにこの点にあります。そしてそれらは日本人の古来からの価値観すなわち自然の中から学びその中に美を見出すという姿勢が優雅で価値のある精神であるという考え方によって生み出されてきたのです。現代の日本の大衆文化（ポップカルチャー）の源はこの江戸時代にあります。香道もまさにこのような文化背景の中でこの時代に完成を見るのです。

香道には公家を中心とした「御家流」と武家を中心とした「志野流」の2つの種類があります。しかし、基本とする所は、香りを聞くという点で全く同じで、様式が異なるだけです。香道では香りをかぐといわないで聞くといいます。それは精神を集中して、その微妙な香りからこの神秘的な自然の心を聞き取るというその態度の在り方からきています。このような姿勢はヨーロッパには全く見られないもので、日本の芸術の大きな特徴です。それはアジアの精神といえるかもしれません。香りを聞くためにも色々な作法のプロセスがあります。特別な道具と方法によって、ただの古い小さな木片と思われていたものから特別な香りを引き出す、このプロセスに大きな意味と価値があります。そして、引き出されたその微かな香りが私たちの心に自然の素晴らしさとその神秘を教えてくれるのです。自然への深い理解と自然と一体になること、これこそが日本人が考える芸術の人生の本質です。

一方また日本人はこの高度に洗練された香り文化を楽しむためにゲームを作りました。それは先に述べた源氏物語からヒントを得た源氏香というゲームです。これは、後で皆さんに体験してもらいますが、自分が聞いた香りを当てるゲームです。この香道とゲームはニューヨークやワシントンでは大反響を呼び多くのマスコミが大きく取り上げました。今日の香道の会がインドネシアでは初めての試みですので、関心のある方はぜひ挑戦してみてください。